

日本アフェリシス学会第 20 回関西地方会抄録

2001 年 12 月 8 日 (土) 於: ポートピアホテル 大会長: 高光義博 (兵庫医科大学)

〈一般演題 I〉

重症 Rh 式血液型不適合妊娠に対し二重濾過

血漿交換を計 27 回施行した 1 症例

宮川光二*¹・板花玲子*¹・西影裕文*¹・和泉雅章*¹平岡敬介*¹・井上 徹*¹・中西 健*¹・高光義博*¹藤城佳世*²・堀 理照*²・伊田昌功*²・香山浩二*²兵庫医科大学人工透析部*¹, 同産婦人科*²

【症例】 32 歳, 女性, 血液型 B (－), 5 妊 1 産 (4 回人工流産)。

【現病歴】 抗 D 抗体陽性にて Rh 不適合妊娠管理目的に妊娠 19 週で入院。

【経過】 抗 D 抗体を除去目的に, 入院同日より DFPP を開始, 娩出までに DFPP を計 27 回施行した。補充液は感染などの副作用, 合併症を危惧し, サブラッド B 液とアルブミン製剤を使用, 一度だけ凝固因子補充目的に新鮮凍結血漿 12 単位を補充液とした。抗体価 512~4,096 倍で経過した。母体に対し DFPP の副作用で, 重篤なものはみられなかった。胎児には娩出前より重篤な貧血と, エコー上軽度の浮腫を認めたが, 発育遅延は認めなかった。貧血に対し娩出までに計 5 回胎児輸血を行った。妊娠 29 週に帝王切開にて娩出, 娩出時胎児体重 1,104 g, 仮死状態で, Apgar Score は 1/4 点であった。NICU 入室し現在も加療中である。稀な症例であり, 過去の報告も交え, 若干の考察を加え報告する。

血液型不適合にて肝移植前に全血漿交換を施行した

アラジール症候群の一例

田中芳徳・久世幸吾・深津敦司

京都大学医学部附属病院人工腎臓部

肝移植時に血液浄化療法が必要となる場合がある。その一つに血液型不適合移植における術前・後の凝集素抗体除去がある。

当症例は 1 才 7 ヶ月 (体重 8.1 kg, 身長 70 cm) の男児である。生直後より黄疸・灰白色便があり, 生後 2 ヶ月時に肝生検等にて肝内胆管低形成を認めた。他に軽度肺動脈狭窄, 左腎低形成, 特異顔貌等を伴い, アラジール症候群と診断された。肝障害の改善を認めず, 生体部分肝移植目的にて, 当院移植外科へ平成 13 年 8 月 22 日に入院した。この症例の血液型は O 型 Rh (－) であり, 父親は A 型 Rh (+), 母親は O 型

Rh (+) であった。母親に疾患の責任遺伝子がある可能性が高く, 父親がドナーとなった。術前日の 8 月 28 日に AB 型 Rh (－) の血漿にて PE を施行した。また循環動態の安定化及び, 貧血の改善の為に, O 型 Rh (－) の MAP にてプライミングした。翌 8 月 29 日移植術を施行した。術後経過は良好にて 10 月 7 日に退院した。

移植に提供される臓器数が少ない現状では血液型不適合の移植は増えることはあっても減ることはないと思われる。上記のように血漿交換による抗体除去は血液型不適合移植に対して有効であると考えられる。

妊娠後期の高脂血症に続発した急性膵炎に

血漿交換を施行した 1 症例

海部久美子*¹・豊田和寛*¹・板花玲子*¹・西影裕文*¹和泉雅章*¹・平岡敬介*¹・井上 徹*¹・中西 健*¹高光義博*¹・奥谷 龍*²・木田有利*³兵庫医科大学人工透析部*¹, 同集中治療部*²高砂市民病院内科*³

【症例】 35 歳女性。妊娠 38 週。心窩部痛, 背部痛を主訴に近医産婦人科受診。血中アミラーゼ 1,129 IU/l, 中性脂肪 13,010 mg/dl, 胎児仮死が疑われ緊急帝王切開術が施行されたが胎児はすでに死亡していた。手術時, 後腹膜血腫 (赤乳糜色, 無臭) を認めドレナージ術が施行された。術後覚醒不良, 血圧低下のため当院に搬送となった。輸液により循環動態は改善した。病歴より DIC も疑われたが, 強乳糜血清のため血液生化学および凝固検査の一部は判定不能であり病態の把握が困難であった。高脂血症に対し FFP を補充液とした全血漿交換を 2 回, また膵炎に対し CHDF を施行した。以上の治療により中性脂肪, 急性膵炎重傷度は速やかに低下し全身状態の改善が得られた。

【考察】 高中性脂肪血症に急性膵炎を併発した妊娠症例は本邦において 39 例報告されている。発症機序として, 基礎に存在する LPL の活性異常が, 妊娠によって顕在化することが考えられている。妊娠早期から対処し母子ともに救命できた症例も報告されており, 反省すべき点の多い症例であった。